馬良がゆく

はくび

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
馬良がゆく

【Ｎコード】
Ｎ３６６８Ｉ

【作者名】
はくび

【あらすじ】
時は三国時代。
荊州を治める劉備は、北の曹操、東の孫権の猛威に怯えていた。
軍師孔明は、西に位置する益州を力づくで奪い、それらに対抗するよう勧めるが、戦争を好まない劉備は益州との和平を望んだ。
双方の意見が一向にかみ合わない中、益州出身である馬良が名乗りをあげ、自分が益州の主である劉璋に会い、益州を劉備に譲るよう説得してくると言い出した。
無謀とも思える提案に疑問の声もあがるが、劉備は馬良に託すのだ

った。

劉備を益州に迎えたい一心で荊州を出発した馬良であったが、その旅は過酷なものとなった。

馬良は無事任務を遂行することができるのだろうか……

馬良の提案

孔明は劉備に言った。
『天下を三分するのです。北は曹操。東は孫権。そして西南の地を我が物とすれば天下を制することも叶います』
しかし現実は違った。
劉備は荊州ただひとつを持つのみ。それより領土を広げることが出来ずにいた。
孔明の言う蜀の国を構えるためには、荊州から西に位置する益州を奪う必要があった。
益州は広大で豊かな土地であった。
そこを治めるのは劉璋（りゅうしょう）。
劉備とは同じ漢王室の血を引いており、遠い親戚といった関係であった。
ゆえに、劉備は劉璋との平和協定を望んでいた。
劉備は赤壁にて曹操を破り、その名を轟かせていたのに対し、劉璋の力は未知なるものであった。
しかし曹操、孫権の2大勢力にとって、もっとも目障りな存在は劉備であった。
その2大勢力が軍を建て直し、荊州に狙いを定めることは明らかであった。そうなれば荊州などの小国は一握りに潰されることは目に見えていた。
荊州城内では、常に会議が行われていた。
劉備と家臣との間には、いつもながら重苦しい空気が漂っていた。

「兄貴！いつまでこの城に閉じこもるおつもりなのだ？　早く戦（いくさ）がしたくてたまらん！」
「私も同感です。この際、益州に乗り込んだらいかがです？」
劉備を兄貴と呼ぶのは、義兄弟の契りを結ぶ関羽と張飛であった。

「何べんも言わせるな。それは出来ない。劉璋殿とは助け合っていくべきなのだ」
「相手が了承するか分かりません」
関羽、張飛は頭を抱えた。
「孔明。お主はどうだ？」
目を閉じ会話の模様を聞いていた孔明が、静かに目を開けた。
「私も関羽殿たちの意見に同じです。この荊州だけでは、この先曹操や孫権の攻撃から持ちこたえるのは難しいでしょう。赤壁での我が軍の勝利以降、曹操も孫権も我々の力を恐れています。こちらの軍事力が不十分な今を狙わんと、兵力を蓄えていることでしょう。もしもどちらかに大軍で攻撃されたならば、我々に対抗する術はないでしょう……」
「お主の戦略もってしてもか？」
「はい。非力ながら……」
頼りとしている孔明の、まさに現実を突きつけるかのような言葉を聞き、劉備は大きくため息を吐いた。
しかし顔を上げ。
「心配することはないだろう。我が軍には孔明だけではない、関羽、張飛といった優秀な人材が数多くいる。そう簡単に負けはせぬ」
力強く言った。
根拠のない強がりに見えなくもない。一同の表情は浮かないものであった。
その時、張飛が立ち上がった。
「兄貴、俺に行かせてくれ！　一人で行って劉璋の首を取ってきてくれる！」
「ならぬぞ張飛！　我が軍からは誰一人、益州に入ることを許さん」
出鼻をくじかれ、椅子に座り込む張飛。
優秀な武将であるがゆえに、皆が感じるフラストレーションも大きかった。
そんな時、今度は別の男が立ち上がった。

「では私目に行かせては下さいませんか？」
それは、ごく最近劉備の配下になった馬良であった。
「おお馬良か」
「はい。私目、まだ劉備殿の下に身を置いて日も浅いですが、以前は劉璋の家来でした。私が説得すれば劉璋殿も分かってくださるかもしれません」
「何を説得するのだ！？」
周りから疑問の声が上がる。まだ新米の馬良を疑いの目で見る者も多かった。
「劉備殿に益州を譲っていただけないか、交渉して参ります」
「なんと！　益州を？」
劉備はその大胆な発言に驚いた。
「はい。劉璋という人物を簡単に説明致します。まずあの方は民から慕われておりません。そして私もあの方の政策には不信感を持っていました。民は幸せな生活ができないのが現状です。そんな益州を見てきた私は、蜀を託せる人物が他にいないかと探し、劉備殿にたどり着いたのです。短い期間ですが私には分かりました。あなたは蜀を治めるのにふさわしい人物。そうと分かれば無駄な血を流さず、蜀の民に平和をもたらす案を劉璋殿に提唱して参ります」
「それは素晴らしい。それが本当だとすれば、私としても願ってみないことだ」
「私も劉備殿がもし蜀を治めてくだされば、こんなに嬉しいことはありません。おそらく民も同じ気持ちでしょう」
「しかし劉璋殿とは、何も益州を譲るとまでいかずとも、協定を結ぶだけでも十分と思っている」
「それは劉璋殿も快く引き受けてくださるでしょう。しかし問題は民達です。庶民の暮らしは改善されません。彼らの中には、益州を出て、荊州に移り住もうとする者で溢れていると聞きます。劉備殿が荊州に入られてから特に多いそうです」
「それは本当か？」

「はい。しかしそれは益州の国力低下を招く。それを恐れた劉璋は、益州から荊州の州境に監視兵を置き、そこを通る者に金の支払いを課しました」
「ということはつまり？」
「一般庶民は州を渡ることすらできないということです。州越えの際要求される額は、一般庶民ではとても払えるものではないのです」
「つまり劉璋は、民を益州に閉じ込めたというわけか……」
「その通りです。荊州に入ってこられる人間はごくわずか。中には監視兵の目を盗んで荊州に入り込まんとする者がいるのですが、もし見つかればその場で止められ、引き返さないようであれば切り殺されます。それでも死を覚悟で益州を抜け出そうとする民が後を絶たないと噂で聞きました」
「それはひどい……」
「集めた金は軍事資金に充てられるそうです。それがあの方のやり方です」
「うむ……　この劉備も益州の民のために、何か出来ることがあればいいのだが」
「私にお任せください。劉璋に会い、必ずや益州を劉備殿にお譲りいただくという了承を頂いてまいります」
「確信はあるのか？」
「いいえ。絶対とは言い切れません。しかし私がやらねばなりません。益州のこと。さらに益州の民のためとあらば」
「そうか。ではそなたに任せるとしよう」
「かしこ参りました。必ずや朗報を携えて戻ります」
「頼んだぞ馬良」
「はっ！」
馬良は深々と頭を下げた。
「して馬良。金はいかほど必要か？　いくらでも望む額を申すがよい」
「州境を渡るための金。その往復分だけで結構です。出発は明日に

致します」
「うむ。よい知らせを待っているぞ」
誰もが期待を込めた眼差しを馬良に向けていた。
こうして会議は終了となった。

その夜、孔明は一人で城外の夜風に当っていた。
そこへ関羽と張飛が姿を見せた。
「孔明殿」
「おお。これは関羽殿に張飛殿」
「どんなものでしょう？　馬良はあのように申していましたが、うまくいくでしょうか……」
「私も色々と考えてはみたのですが、今は彼を信じるよりほかありません」
「そうですか…」
関羽は孔明の顔色を見て、事態が打開されていないと感じた。
続いて張飛が。
「そこで孔明殿。我々二人で考えたのですが、何とか劉璋を挑発して相手から攻めさせるっていうのはどうでしょう？　敵が攻めてくるのでは兄貴（劉備）も戦うより仕方ないでしょうから！」
孔明の表情は変わらなかった。
「私もそれは考えましたが、殿はこうおっしゃいました。もし劉璋が荊州を攻めてくるようなことがあれば、自分は戦わずしてこの荊州を明け渡すと……」
「なんですと！？」
「あくまでも殿は劉璋とは戦わないお覚悟なのです」
「くそ……　それでは荊州を手に入れる前の、領土を持たない流浪の将に逆戻りではないか！」
「そうならないためにもどうするべきか。今考えていたところです」

張飛は頭を抱えた。関羽が再び聴く。
「何か良い策はないものでしょうか？」
「もはや馬良殿に託すしか道はないのかもしれません」
「そうですか。何も出来ないというのは残念でなりませぬが、仕方のないことなのかもしれませんな」
二人は諦め、引き上げていった。
孔明は空を見上げ星を見つめ、扇子で自らを仰ぎながら思考にふけっていた。

それから二時間後。自室で出発の準備を整えていた馬良の部屋を孔明が訪れた。
「失礼。よいかな？」
「おお、これは孔明殿！」
馬良は孔明直々の訪問に驚いた。馬良は孔明を尊敬していた。赤壁で曹操軍を圧倒的不利の状況から破って以来、孔明の下で学びたいといった気持ちがあった。
「こんな夜更けに驚きました。さあどうぞ」
馬良は孔明を部屋の中へ促した。
「馬良殿。今日のあなたの論議、実に見事でした。殿のあのような希望に満ちたお顔を拝見するのは久しぶりです。もはや我が軍の命運を握るのも馬良殿の手腕にかかってきてしまったようで、殿に仕える身として己の無力さを痛感しています」
「何を言われます孔明殿。私はあなたの知略には、予てより感服しておりました」
「いくら最善の策を考えたところで、それを取り入れてもらえなければ、そんな策はなきに同じ」
「お察しします」
「馬良殿が再び荊州に帰還する日を心待ちにしていますぞ」

「もったいないお言葉。孔明殿の期待に応えられるよう、そして何より益州の人々の平和のためにやらねばなりません」
そう言い、馬良は小さく頭を下げた。
すると孔明は服の中から、一本の見事な剣を取り出した。
それは短剣であるが、鞘に様々な宝石がちりばめられており、とても美しかった。
「馬良殿。これをお持ちになってください」
「こ、これはなんと見事な剣でしょう！」
馬良は孔明からその剣を受け取り、近くでじっくりと眺めた。
「それは六星剣といわれる、この地に古くから伝えられる名刀です。劉璋がどうしても承諾なさらぬ時の切り札としてお使いください。劉璋に献上して頂だいて構いません」
「こんな大そうなものを！？」
「それと引き換えに益州が手に入るのであれば安いものです」
「分かりました。大切にお預かりします」
馬良は六星剣と、金品だけは何があっても奪われる、もしくは紛失することのないよう、体に強く特殊な布で巻きつけた。
「それともうひとつ聞いておいてくれ」
改まった様子で孔明が口を開く。何事かと馬良は顔を上げた。
孔明は静かではあるが、力のこもった口調で話した。
「もし、劉璋がその六星剣を差し出しても、我々の要求、あなたの説得に応じない場合は……」
強い視線は馬良一点に集中していた。
そして孔明は言った。
「その時は、その剣で劉璋を斬ってください」
「な、なんですと！？」
馬良は驚いた。同時に孔明から発せられる異常なまでの殺気を全身で感じた。

馬良の提案（後書き）

次回…２４日投稿予定　第４回で完結予定です

馬良の説得

「こ、孔明殿……　私の聞き違いでしょうか？　今劉璋殿を殺せと……」
「聞き違いではありません」
「正気なのですか？」
「もちろんです」
まったく揺らぐ様子のない孔明。それに対し声が震える馬良。
「それは困りました……　仮にも私は劉璋殿に仕えていた身。かつては厚い忠誠を誓ってきました」
「分かっています。それを承知の上でお頼みしているのです」
孔明の言葉に馬良は戸惑った。
孔明は続けた。
「先ほども申した通り、この荊州だけでは曹操もしくは孫権の手に落ちるのは時間の問題。益州を手に入れ迎え撃たなければ、その２大勢力には到底太刀打ちできません。もし我々がどちらかの手に落ちたとすれば、益州の運命も荊州と共にあります。しかし、もしあなたが劉璋を殺し、益州の即位から退かせることができれば、殿は迷うことなく兵を進めることができる。もはや曹操孫権の手から蜀を守る手立ては他にありません。そして、我が陣中において劉璋に近づけるのはお主ひとりなのだ」
わずかな間を挟み、馬良が言った。
「孔明殿がそこまでおっしゃるということは、それが事実なのでしょう。これも益州のため。その任務お引き受けいたします」
「本当かな？」
「はい。先ほど孔明殿は、どんな最善の策も取り入れられなければ無きに同じとおっしゃいましたが、私は今、劉備殿の配下。孔明殿の命令とあらば、いかなることでもお引き受けする覚悟です」
「危険な役目になるが……」

「承知の上です。必ずや、劉璋殿の良き返事を。それが叶わなければ、劉璋殿のお命を手土産に戻って参ります」
「よく言ってくださった馬良殿」
孔明は馬良の肩をさすり、大きく頷いた。
馬良はこう付け加えた。
「ただ、私は信じています。劉璋殿は分かってくださると……　劉備殿の気持ち。そして民のことを」
「私もそれを望みます。劉璋が理解のある人物であることを」
馬良は深々と頭を下げた。
「それでは六星剣はお預かりします」
「頼みましたぞ」
馬良は孔明の大きな期待を背負うこととなった。
そして益州の民のために、たとえ命を落としてでも使命を果たさねばといった責任感も芽生えた。
こうして劉備、劉璋、そして益州の民の命運は馬良の肩に託されたのである。

翌日馬良は、劉備、孔明、その他数十人の部下に見送られ荊州を出発した。
州境では監視兵に見つかるも、金を出し通過した。
監視兵も馬良が益州に入ったことを劉璋に伝える手はずを取った。
四日あまり馬を走らせ、ようやく中心地に入ってきた。かつては人で賑わっていた集落が、今ではすっかり荒れ果てた荒野と化していた。あの豊かな益州はどこへ……馬良は言葉を失った。
城下町に入っても民衆の姿はまばらに思えた。
『どこを見ても人気は少ない……　まさか民の多くが荊州を目指して殺されたなんてことは……』
嫌な考えが脳裏をよぎる。
馬良はわずかな食料で空腹をしのぎ、ひたすら劉璋のいる成都城を

目指した。
到着したのは、荊州を発って一週間後であった。

馬良が到着した成都城は、異常なまでの慌しさを見せた。
そして馬良は、劉璋を含む部下数十名の待つ間へと通された。
すでに知らせを受けていた劉璋は、待ち詫びたかのように馬良を見下ろした。
「久しぶりだな馬良よ」
「はい。荊州の偵察に行ったきり、報告が滞ってしまい申し訳ありません」
「ハハハ。てっきり劉備の家臣になったものと思っていたが」
劉璋は冷たく、蔑んだ笑みを浮かべ言葉を吐き捨てた。
それに対し、馬良は自分の立場をわきまえ振舞った。
「荊州に行ったことで収穫はありました。劉備殿は噂通りの立派なお方でした」
「まさかそんなことを伝えに来たのではあるまいな？　用件を聞こう」
「劉備殿は殿との平和協定を望んでおられます」
「ほう。おそらくそんなことであろうと予想はしていたぞ。ワシは心が広いからな。いざという時は、助けを出してやらないこともないぞ。ただし、それに見合うだけの金品をよこすぐらいの態度を示せばの話だがなあ」
劉璋は挑発的な姿勢を取った。
しかしそんな劉璋に構わず馬良は続けた。
「この国の現状をご存知でしょうか？　北には曹操の大軍。東には孫権。どちらの勢力も強大で、荊州もこの益州もその力に太刀打ちすることは難しいでしょう」
劉璋は不機嫌そうに顔をしかめた。

「だから何だ？」
「一刻も早く荊州と益州を統一し、蜀をまとめる人物が必要です」
「なるほどそういうことか。話はよめたぞ。つまり劉備に代わって、ワシが荊州も治めればよいということかな？」
「いいえ……　率直に申します。益州を劉備殿に譲って頂きたい」
その言葉を聴いた劉璋の眉がピクッと動いた。
「おい馬良。言い違いはなくすよう心がけねばならんぞ」
「いいえ。言い違いではありません。ぜひ劉備殿を益州の……　いえ、蜀の主に！」
「ふざけるな！」
劉璋が凄い剣幕で立ち上がった。
「馬良！　しばらく見ぬうちに、すっかり劉備に取り込まれたようだな！」
「違います。私は客観的に見て申しているのです」
「黙れ！　よいか？　考えてもみろ。我が益州は荊州などとは比べ物にならぬほど、大地は肥沃で広大、更には優秀な人材に溢れている。荊州の劉備など比ではない！」
「それは存じておりますが、荊州の劉備殿は赤壁にて、曹操軍の大軍を破るという功績をあげています。それもわずかな手勢で……軍師孔明殿は今や曹操、孫権もが恐れる存在となっています」
「だから何だと言うのだ？」
「劉備殿の力は強大だということです」
劉璋にとっては実に面白くない話である。劉璋はおもむろに馬良に近寄より、姿勢を低くした馬良を上から睨んで言った。
「よし！　ならば見せてやろうではないか！　我が軍と劉備軍。どちらが勝っているか！」
続けて劉璋は、参謀である張松（ちょうしょう）に。
「おい張松！　出陣の用意は出来るか！？」
「はい、いつでも準備は整っております」
その言葉を聞くとニヤッと笑みを浮かべた。

「聞いたか馬良。お前がそう言うならば、私が劉備を討ち滅ぼし、誰が蜀の主に相応しいかを証明してやる！」
馬良は顔を上げ。
「それはお止めください。今は劉備殿と争っている時ではありません。曹操や孫権もこの地を狙っています。今、仲間割れのような戦をすることは、その手助けをするようなものです！」
「黙れ！このままではワシの気がおさまらん！」
「お待ちください。劉備殿はあなたと戦うことを望んではいません。戦は民を苦しめるだけです！」
馬良は床に額を擦りつけ。
「どうか劉備殿に益州を！　それが蜀の地を、そして民を守るための道なのです！」
「ええい、黙れと言っておるのだ！！」
劉璋は鬼の形相となった。
その瞬間。やはり聞いてはもらえないのかといった悔しさが馬良の胸に込み上げた。
そして次なる手段にでた。
「お聞きください。劉備殿は、もしあなたが益州を譲ってくださるのであれば、荊州の地に古くから伝わる名刀『六星剣』を献上すると言っておられます」
そう言うと、懐からあの宝石に輝く剣を取り出した。
それを見た劉璋。
「何？　劉備がその剣をワシに？」
六星剣を手に取った。じっくりと眺める。
「確かに美しい剣だ」
「それでは交換条件を飲んでいただけるのですか！？」
しばらく悩む劉璋であったが。
「それとこれとは別だ。いくら立派な剣でも、益州の地とではつりあわん。それに剣というものは外観が美しければ良いものではない」
そう言って六星剣を押し返してきた。

「お待ちください。その剣は切れ味も天下一品なのです。おそらく六星剣に勝る剣は存在しません」
「それは誠か？」
劉璋はその言葉を聞き、剣の刃の部分を見ようと思ったが、剣を鞘から引き抜こうとしてもまるで抜ける気配がないのだ。
まるで鍵がかかっているかのように。
「これはどういうことだ？　剣が抜けないぞ」
「はい。それは誰もが使えぬよう、抜くためのちょっとした細工がなされているのです」
「どれ。早く引き抜いてみるがよい。どの道、益州との交換条件にする気はないが、見るだけは見てやろう」
その一言に馬良の心の中には暗雲が立ち込めた。落胆の念が込み上げる。諦めの心も。それと同時に最終手段に踏み切るための心の準備を始めた。
「では、六星剣を抜きます」
馬良は静かに頭を下げた。
劉璋の手から六星剣を受け取ると、細工を外し、鞘から引き抜いた。輝くような刃が姿を現した。
「ほう。それがそんなに名刀なのか？　鞘に入った刀は確かに美しいが、抜けば私の剣と大差はないように思えるぞ」
決断の時がきた。そう直感した。馬良の心の中で何かが動いた。
「では、試してみてはいかがですか？」
「試すまでも無い。とっととその剣を持ち帰って劉備に伝えろ。明日にでもお前の首を取りに行ってやると！」
その瞬間馬良の目つきが変わった。そして低い声で言った。
「では私が試して進ぜましょう……」
「何？」
思わず聞き返す劉璋に、馬良は素早く身をおこすと体当たりをする形で、劉璋の胸目がけて剣を付き立てた。周りを囲む劉璋の部下からは、どよめきが起こった。

しかしこの時、もっとも違和感を覚えたのは馬良自身であった。
六星剣が劉璋の体に食い込む感触がない。そのうえ自分の手には激しい痺れ。そして剣で突き刺した瞬間に鳴り響いた金属音。
すると劉璋の不敵な声がした。
「相変わらず浅はかだのう馬良よ」
劉璋は服の下に鉄の胸当てをしていたのだ。
六星剣の刃はそれに阻まれていた。
参謀である張松が言った。
「馬良よ。お前がそのような行動に出ることは想定内だ。万一のために、殿には護身用の胸当てをして頂いたのだ。この裏切り者め！」
張松の指示で部下たちが馬良を取り押さえた。
『くそ……　なんということだ！　全て見透かされていたとは！』
馬良は兵に押さえ込まれ、床に倒れこんだ。
劉璋が服の乱れを直すと。
「これでお前は完全に劉備の家来と証明されたわけだ。残念だぞ。お前は優秀な家来だった。ワシの下にいれば、いつの日か蜀の主となるワシの片腕になれたものを……」
「劉璋。これだけは言っておく。あなたには蜀を治めることはできない。民を守ることも」
「反逆者がデカイ口たたきおって」
そして、馬良は心の中で詫びた。
『無念……　孔明殿お許しください。あなたから与えられた任務を果たすことが出来ませんでした…』
劉璋は部下全員に言った。
「よいか！　この者は明日、百叩きの刑のち、打ち首に致す！」
部下が平伏した。
「馬良よ。この六星剣は預かっておこう。明日、このワシが直々に切れ味を試してやる。お前の首でな……」
薄ら笑みを浮かべ劉璋は言った。
そして馬良は牢獄に連れて行かれた……

馬良の説得（後書き）

次回２７日予定　全４話完結

馬良の危機

翌日。日が昇り、劉璋の元に張松が報告に来た。
「殿。百叩きの刑が始まりました」
「そうか」
劉璋はゆっくりと立ち上がった。
処刑は城外で行われることになった。馬良は民衆からも信頼が厚い。下手にその姿が目撃されると、収拾がつかなくなる恐れもある。城の裏手に、まさに邪魔者の入る余地のないうってつけの場所があった。背後は崖で人目にもつかない。処刑はそこで行われることになった。
劉璋の到着した時には、馬良はすでにわずかな息しかしていない状況であった。
顔は腫れ上がり、上半身には罪人用の薄い羽織一枚。体から出血した血で服は赤く染まっていた。
それでもたたき続ける兵達。
「待て。死んでしまうぞ」
劉璋が制止を促した。しかし張松。
「殿。まだわずか４０回しか叩いていません。あと６０回残っております」
「死なれては困る。とどめはこの私がさすことになっているであろう？」
劉璋はゆっくりと六星剣を抜くと、馬良の髪をつかみ引っ張り上げた。
もはやかろうじて生きているとしか思えぬ馬良の首に剣をあてた。
しかしその時だ。
馬良の目がカッと見開き、強烈なパンチが劉璋の腹へ深々と食い込んだ。
今度は金属の音はなかった。

馬良捨て身の攻撃であった。
劉璋は不意打ちを食らい、その場にうずくまった。
その隙に馬良は周りを取り囲んでいた兵士に体当たり。見事包囲網を突破した。
張松が声を上げる。
「クソッ！　瀕死のふりをしておったな！」
取り囲んでいた兵士も不意をつかれた様子で、まったく武器を手にすることもなく馬良の突破を許した。
「矢だ！　矢を放て！！」
張松の命令で兵士たちが弓を構える。
そして矢の雨が馬良に降り注いだ。
しかし馬良は心の中で暗示をかけた。
「当らない……　劉璋軍の矢なんて当たるものか！」
辺りを確認する間すらない。ただ力の限り走った。
「おい！　逃げられてしまうではないか！」
憤慨する劉璋。しかし張松は冷静な面持ちで言った。
「大丈夫です殿。逃げ道はありません。ヤツの走っていく方向には崖があるのみです」
「そう言われればそうだな。ハハハ」
しかし、矢の雨は休むことなく放たれた。
その中の一本が馬良の肩を貫いた。
一瞬足がふらつくが、それでも足を止めない。
そして、ついに崖の上から勢いそのままに飛び降りた。
一心不乱に走っていた馬良に崖など見えていなかった。
馬良の姿が視界から消えると、矢の雨は止み、劉璋らが後を追った。
崖から下を見下ろすと、ちょうど１０メートルほど下ったところに一本松が生えていた。
馬良はその松に引っかかり、かろうじて一命を取り留めていた。
さらにその松から１０メートル下は川だった。それもかなりの急流である。

「まったく運のいいヤツめ！」
「殿どういたしますか？　矢を放ってとどめを刺しますか？」
「ワシが処刑を行うはずだったものを……　この距離では六星剣を使いようがない。まあ、ほっておいてもヤツの命は長くないだろう。あのまま松にぶら下がったまま死ぬか、川に落ちて溺死するか……」
「確かにその通りですね」
「せめてものワシから褒美だ。ヤツの死に方はヤツに決めさせてやろう」
こうして劉璋達は引き上げていった。
松の枝によってかろうじて川への直接落下を免れた馬良だったが、その服は体をきつく締め付け、耐え難い苦痛を与えていた。
服が首に食い込み、意識が遠のく。
薄れる意識の中で馬良は自分に言い聞かせていた。
「ここで死ぬわけにはいかない！　孔明殿との約束も果たせていない。それに益州の民も……」
その気持ちからか、最後の力を振り絞り体をよじり続けた。
すると枝に引っかかっていた服が外れ、馬良は川の中に落ちた。
急流に呑み込まれた馬良は、その後消息を絶った……

それからどれほど時間が過ぎたのか……
馬良は目を覚ました。
ここが何処だか分からない。全てがぼやけて見える。自分が生きているのか死んだのかもはっきりしない……　そんな状態であった。
しかし老人のものと思われるその声は、はっきりその耳に届いた。
「これは驚いた！　目を覚ましなさったか、お前さん！？」
「ここは……　どこ…」
「心配することはない。わしの家だ」
「私は生きているのか……」
「生きているとも！　しかし驚いたぞ。お前さんは瀕死の状態で近

くの川岸に倒れていた。それを見つけたもんだから慌ててここまで運んできたのだが、死ぬのも時間の問題だと思っていたからな」
「あなたが助けて？」
「そうだ。その時偶然近くに医者が来ていて、ちょっとだけ立ち寄ってもらったんだ。生きていることが奇跡だと言われたよ。おそらく目を覚ますことはないと……」
「あなたは？」
「なあに……　ただの老人だよ」
馬良はひとまず安心し、大きく息を吐いた。
そして老人の話を聞きながら、必死に過去の記憶を整理していた。幸い記憶はしっかりしていた。劉璋のことも、崖から落ちたこともはっきり覚えていた。
老人は更に医者の話を続ける。
「医者はすぐにでも手当てすれば助かるかもしれないとは言った。ただ、わしにはそんな金はない。今はどの町も病人で溢れている状態だ。仕方なく、わしが出来るだけの手当てはした。あとは意識が戻るのを気長に待つつもりだったが、まさか本当に目を覚ますとは思わなかった」
ふと自分の肩に目をやると、馬良が矢で負傷した箇所には包帯が巻かれていた。
馬良は老人に礼を言った。
老人の気遣いか、近くで焚き木が燃やされていたため、体は温かく着物も乾いていた。
馬良はふと思い出し、自分の腰巻きに手をやった。
大切な金を忍ばせておいた場所であった。ここばかりは劉璋にも悟られずにホッとしていたのだが、今はどうか？
幸い大丈夫だった。手でその感触を確かめた。金は無事だ。
しかし体を動かすたびに、体中に激痛が走る。全身に電流が流れるような。
これは動くのは無理だ。そう感じた。

「お前さん、あまり動かないほうがいいぞ。酷い怪我をしているのだから」
老人は馬良を気遣った。
しかしそれが馬良であることには気付いていない様子だった。
無理はない。棒で殴られ続け、顔は誰だか分からないほどに膨れ上がり、着物は薄汚い罪人用のものだ。
「それよりいったい何があったのだ？　山賊にでも襲われたのか？」
「そうではない……　劉璋の暗殺を謀って失敗したのだ。拷問の最中に命からがら逃げ出すことは出来たが……」
「劉璋の命を！？　あんたいったい何ものだ？　とても正気とは思えない！」
「そうか分からぬか、私の顔……　馬良といえば分かるかな？」
「なんですって！？　馬良様！？」
老人は驚いた。
「これはエライことだ！　しかしなぜそんな危険なことを！？」
「私は今、劉備殿の家来だ」
「あなたが荊州に渡ったことは知っていましたが、何もそんな危険なことを……」
「私は劉備殿に益州を治めてもらいたく、その一心で劉璋を説得したのだが、聴きいれてはもらえなかった……」
「あの劉璋では無理ないかもしれませんな。とはいえ、劉璋も一度は自分の家来だった馬良様に、あんまりの仕打ち……」
「それは覚悟の上。仕方のないことだ。私の力が至らなかったのだ」
「しかしなぜこんなことに……　わしらはずっとあなたを待っていました。あなたが荊州に行ってからというもの、庶民の暮らしは辛くなる一方。町の若い者は皆徴兵され城に出向いていきました。残ったのは年寄りばかり。人手が足りなくなり食物がなくなり……餓死するもの。疫病にかかるものが後を絶ちません」
「そうであったか……」
「皆益州を捨て、噂で聞いていた荊州の劉備というお方のもとを目

指しました。しかし劉璋は州境に兵をめぐらせ、荊州への逃亡を許しませんでした。我々庶民には到底払えるはずもない金を条件にし、益州に閉じ込めたのです。もはや我らの望みは、あなたが再びこの地に戻ってきてくださるのを信ずることだけでした」
「その気持ちは嬉しいが、劉備殿の配下となった今、益州に居座ることはできない。かといって荊州に戻ることも出来なくなってしまった。劉璋から益州を譲る承諾を得られていない。それに孔明殿との約束も果たせず……　このまま荊州に帰っても劉備殿達に会わせる顔がない」
「それでしたら、なんとか益州に身をおいてはくださらんか？　皆歓迎することでしょう」
すると老人は意を決したように立ち上がった。
「それよりも、すぐ医者を連れてきます。まずはその怪我を治すことが先決。あなたが馬良様であると分かれば、医者も金を要求することはないでしょう」
そう言うと老人は身支度を始めた。しかし馬良がつぶやく。
「金ならあるぞ」
老人はその手を止めた。
そして指示にしたがい、馬良の体に強く巻きつけてある布を解いていった。その内側には金が大量に隠されていた。
「これは驚きました！　こんな大金をお持ちだったとは……　なんということでしょう。もっと早く知っていれば……」
老人は後悔した。
「申し訳ない。この金に気付いていれば、もっと早く治療ができたのに」
「謝ることはない」
「しかし、これで医者も文句はないでしょう。今からでも遅くはない。すぐに医者を呼んできます！」
老人が家を飛び出そうとしたとき、再び馬良が止めた。
「待ってくれ」

「馬良様！　どうしたというのですか！？　このままではあなたのお命が！」
「残念だが……　私の怪我を治したところで意味はない……」
馬良はやっとの思いでかすれた声を出した。老人が聞き返す。
「なにをおっしゃいます！　あなたがいなくなったら益州の民はどうなるのですか！？」
「心配ない。劉備殿がいる」
「確かにあの方は立派だとは伺っていますが、いつになったら益州を平定してくださるのです！？」
「殿と劉璋は同じ漢王室の血を引いている。それゆえ殿は益州侵略をためらっておられるのだ」
「そういうことですか。それであなたが劉璋の命を狙うことに？」
「そうだ。劉璋がいなくなれば殿が益州を攻めない理由はなくなる」
「それならば話は早い。あなたが再び劉璋と戦い勝利してくだされば、いいのです。民衆もあなたに従うはずです。劉璋を討つためなら、命を捧げる覚悟の者も多いはず」
「残念だが、私のこの体では無理だろう。劉璋を討つことはできない」
「ですから一刻も早く治療して、民衆と力を合わせ、劉璋に反旗を翻せばよろしいではないか」
「そんなに甘くはない。民百姓をいくら集め戦ったところで、劉璋に勝つことは到底不可能。逆に多くの犠牲を出すだけだ。それに最初に言った通り、今の私は劉璋の配下ではない。劉璋の暗殺を謀ったことで、私は完全に劉璋の敵という立場になった。私が単独で劉璋を暗殺したとすれば、それは劉璋の部下の裏切りで済んだでしょう。しかし軍勢を集めて戦ったりすれば、これは立派な戦。我が殿の御意志に反するものだ」
「そういうことは解りませぬが、まずあなたの怪我を治すことを優先することに間違いはないはず。医者を呼んできます」
「待つのだ」

「まだ止めようとなさるのか！？」
「よいか。私の話をよく聞いてくれ。時間がないのだ。劉璋は荊州に兵を進める気でいる。もしそうなれば、殿には戦う気がない。荊州を明け渡してしまわれるだろう。以前孔明殿が言っておられた」
「劉備という方のことは分かりません！　しかし今、わしにはあなたを助ける責任がある。違いますか！？」
馬良は意を決して言った。
「あなたにお願いしたい。私を……　私を荊州に連れて行ってくれ」
「何を言われます！？　怪我の治療もせずに？　死んでしまいますぞ！」
「死んでも構わない。頼む、私を荊州に！」
老人は全身の力が抜け膝から崩れた。それは馬良を見殺しにするも同じ。馬良は更に続けた。
「この金があれば荊州に渡れる。やってくれるか？」
「正気とは思えません。わしにその決断をしろとおっしゃるのですか？　もっと有意義な金の使い方はないものでしょうか？」
「この金はもともと荊州と益州を往復するために持ってきたもの。無駄な金は持ってきてはいない」
しばらくの沈黙の後、老人は力なく言った。
「あなたの考えていることが分かりませぬが、あなたの頼みを無視することはできません」
「やってくれるか？」
「わしに出来ることであれば……」
その言葉に馬良も安堵の表情を浮かべた。
「しかしこれだけは教えてください。益州はこの先どうなってしまうのです？」
「心配はいらない。益州には素晴らしい未来が待っている……　約束しよう」
そう話すと馬良は再び眠りについた。

馬良の危機（後書き）

次回最終回　３０日予定

馬良の思い

翌朝、老人は食料運搬用の荷車に馬良を乗せ、家を出発した。
馬で移動できないことを考えると、想像を絶する長旅になることは明らかであった。
それも老人ひとりの力で……
若い者に代わってもらおうにも、村には年寄りばかり。
老人を何人連れてこようが足手まといになるだけ。
結局、村の誰にも馬良のことは知らせず、一人で旅立ったのである。
人を乗せた荷車を引きながらの長旅は過酷極まりないものであった。
しかし老人はひたすら歩いた。歩き続けた。
どんなことがあっても途中で倒れるわけにはいかない。
その強い心だけはしっかりと持っていた。
道中たいした食事を取るわけでもなかった。
時々馬良の様子を伺いながら、日々着実に進んだ。

「馬良様お加減はいかがですか？」
問いかけに馬良がわずかに目を開いた。
「馬良様。近くで食料を調達しましたので食べてください」
しかし馬良は必ずこう言った。
「私はいらない。あなたが食べてくれ」
顔には痛々しい傷跡が未だ数多く残っていた。
「馬良様。食べないと怪我も治りませぬぞ」
「今一番大変なのはあなただ。あなたが食べなさい。私のことは考えず、荊州に着くことだけを考えてください。私の望みはそれだけ……　頼みましたよ」
「分かっております。わしが必ずあなたを荊州にお送りすると約束します」
「そうか。このような役目を押し付けてしまい、本当にすまない…

…」
「詫びるのはお止めください」
「もし劉備殿か孔明殿に会ったら、馬良が詫びていたと伝えてください。劉璋を説得できなかった上に、貴重な六星剣まで奪われてしまった。本当に申し訳ないと……」
「もちろんお伝えします。ですが、なぜそのような弱気なことを……　共に荊州の地を踏もうではありませんか！」
それだけ言うと馬良は静かに目を閉じた。安らかな顔をしていた。
それからしばらくして、馬良の呼吸は止まり、静かに息を引き取った……
「馬良様！　馬良様！！　しっかりしてくだされ！」
しかし目を覚ますことはなかった……
馬良は自分の思いの全てを老人に託したのであった。
その時老人は改めて、自分が重大な使命を負っていることを認識した。
そして涙ながらに誓った。
「あなたの意思を無駄にはしません。この命に代えても……」
老人は再び歩き出した。来る日も来る日も歩き続けた。
雨の日も風の日も……　時には空腹との戦いになることもあった。
それでも歩き続けた。

故郷を出発して、すでに一月になっていた。
ようやく荊州との州境にたどり着いた。
近辺の見張りをしていた監視兵が老人の姿を見つけ近づいてきた。
「おい、そこのお前！」
その声に足を止めた。
「勝手にこれより先に行くことは許さんぞ」
「金を出せば良いのか？」
「そうだが、お前のような庶民に払えるものではない！　すぐに引き返せ！」

「これでよいかな？」
老人は懐から金を出した。それを見た監視兵は目を丸くした。
「お前……どうしてこんな金を？」
「通ってもよいかな？」
「ああ……　許そう。いったい何ものだ？」
「わしは急いでいる。では失礼……」
呆然とする監視兵。それに構うことなく老人は歩き出した。
進む距離は日にしてもわずかであった。老人ひとりの足では無理はなかった。
時には険しい山道を、荷車を引いて登ることもあった。
その一方で幸運なこともあった。
道中、山賊や物騒な輩と遭遇することもあったが、金のない老人が死体を捨てに来たと見られるためか、襲われることはなかった。

そして出発から二ヶ月後。ついに荊州城に到着した。
「馬良！」
「馬良殿！」
「な、なんというお姿に……」
馬良の亡骸を見た劉備や、その部下たちは悲痛の声を上げた。
老人がことの次第を説明した。
「馬良様は荊州に向かう道中でお亡くなりになりました。荊州に戻ることを強く望まれました。そして劉備殿に使命を果たなかったことを詫びたいと言っておられました」
「詫びるなどとんでもない」
劉備は目に涙を溜めていた。
「馬良様はわが益州においても欠かせぬお方。このようなことになり無念でなりません。最後まで自分を責めていらっしゃいました」
「馬良よ。お主は私の大切な部下だ。責任感、そして正義感の強い優秀な部下であった。短い期間であったが、よく分かるぞ」
関羽と張飛も声を詰まらせていた。

「馬良殿！なぜこんなことに……」
「誰がこんな酷いことを！？」
老人が説明した。
「劉璋に拷問を受けたのです。劉備殿に寝返った反逆者として……
私が偶然、まだ息のある馬良様を助けました。早く怪我の治療をしないとと思ったのですが、馬良様は、医者は呼ばなくてもいい。自分を荊州に連れて行ってくれと……　私は言われた通りにしました。なんとか荊州に着くまで無事でいてくだされば と願ったのですが、道中でお亡くなりに……」
老人の話に劉備の目から涙がこぼれた。
「こんなことだと分かっていれば、この劉備が助けに行ったものを……　なぜそこまで無理をしたのだ馬良よ」
しばらくの沈黙が流れた。
そしてついに劉備の口から。
「許さん……　許さぬぞ劉璋……」
その言葉に周囲の部下は、にわかに反応を示した。そして、それは空耳でないと確信する。これほどまでに怒りを露にする劉備の姿は見た事がなかった。
そこへ、まさに運命を感じさせる一報が舞い込んできた。
報告に来た兵は慌てた様子で告げた。
「劉備殿、一大事です！　劉璋軍が荊州に進軍を始めました！　すでに州境近辺まで迫っています！」
劉備はその報告にハッと我に返った。一転して現実に引き戻された。
「なんだって！？」
「殿。いかがいたしますか？」
ここまで一言も口を開かなかった孔明が静かに聴くと、劉備は迷いなく答えた。
「迎え討ってやろうではないか。私は劉璋を討つ！」
その声に周囲の誰もが沸き立った。
さながら戦いに勝利した後の祝宴を思わせるほどであった。

誰もが興奮を抑えきれなかった。
「皆の者に告ぐ。これより出陣の準備だ！」
「はっ！！」
「その言葉を待っていました！」
「やってやりましょう！」
「劉璋など私が一捻りにしてくれる！」
方々から意気込みの声が飛び交った。
誰もが待っていた瞬間であった。
孔明は静かな笑みを浮かべ、頷いた。
しかし一番嬉しかったのは孔明に違いない。
誰もが我先にと部屋を飛び出した。手柄に餓えている武将達は誰にも止められない。劉備もそれに続いた。
その場に残ったのは、孔明と老人。そして馬良の亡骸のみとなった。
孔明は馬良に歩み寄った。
「馬良殿。本当によくやってくれた……　すべてお主の力だ……」
こらえていた涙が溢れた。
「私はお主に謝らねばならない」
そして、涙ながらに老人に尋ねた。
「ご老人。馬良殿のこと、他に何か聞いてはいないか？」
「はい。なんでも劉璋を交渉した末に暗殺を謀ったそうで……　不運にも失敗に終わり捕らえられたそうです」
「やはりそうでしたか。暗殺の指示を出したのはこの私。私が馬良殿を殺したに等しい……」
孔明は膝を付き、馬良の亡骸にもたれかかり、その死を悲しんだ。
しかし泣き崩れる孔明に老人は言った。
「それは違います。これは馬良様の御意志でした。私が助けた時の医者の話では、治療を急げば十分回復の余地はあったのです。治療する金もあった……」
老人もその時のことを思い出したのか、表情には悔しさがにじんでいた。

「しかし馬良様は自分の治療は望まなかった……　荊州に行くことを優先したのです」
孔明は馬良の意図を説明をした。
「馬良殿は分かっていたのです。自分がこのような哀れな姿になり殺された。その姿を殿が見れば、劉璋討伐の決断をなさってくれると。生きて荊州に戻るつもりなど始めからなかったのでしょう。命と引き換えに殿の心を動かしたのです」
「分かります。馬良様はそういう方です」
「殿が益州を。そして蜀を治めることになれば、全ての民が救われる。きっとそう願っていたに違いありません」
「馬良様はあなたから預かった六星剣を奪われたことも、最後までとても心残りにされていました」
「そんなものはすぐに取り戻せます。この戦で」
「劉璋軍に勝つ見込みはおありなのですか？」
「もちろんです。殿の気持ちが動いた今、我々に負ける理由などひとつもありません。一月もすれば殿が益州に入り、豊かな蜀を再建させることも夢ではありません」
「それは信用できるのでしょうか？」
「もちろんです。これは馬良殿の願いでもあります。彼の死を無駄にさせるわけにはいきません。誓って……　それが我々の使命です」
「なんと心強い。やはり馬良様が見込んだ方々です」
「ご老人も長旅さぞ辛かったことでしょう。あとは我々に任せ、ゆっくりこの城で休まれるがよい。益州を手中にしたのち、あなたも戻られるがよろしい。馬良殿の墓も益州にと思っている」
「感謝いたします」
「感謝するのは私のほう。あなたは馬良殿と共に、益州だけでなく、我々も救ってくれた恩人であり最大の立役者です。本当に感謝しておりますぞ」
「一介の庶民に勿体無いお言葉」
孔明は老人の肩にそっと手を置き、その労をねぎらった。

そして合戦は始まった。
漢王室の威信をかけた両雄の戦いであったが、勝敗は明確であった。
戦が本格化してきたその十日後、劉璋は降伏し武器を捨てた。
劉璋の部隊のみを集中的に攻撃する孔明の作戦により、両軍とも最小限の被害で戦いは幕を閉じた。
劉璋軍の兵の多くは劉備に投降した。
劉備はそういった武将達も殺すことはなく、全て自らの配下とした。
そしてついに劉備は益州の成都城に入った。
蜀の主となったのである。
こうして国は魏、呉、蜀に分かれ、本格的な三国時代が幕を開けたのである。
劉備の政策により、蜀の国はみるみる豊かになった。いつしか民からも歓迎され、人材も豊富に集まり、一国の主として相応しい存在となった。
馬良は成都城の堀近辺に埋葬された。老人も近くに住み、毎日のように墓参りに訪れたという。
そして、馬良という名とその功績は、蜀の国全ての人々の胸深くに刻まれたのであった……

馬良の思い（後書き）

初の連載もの。無事完結することができました。
最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3668i/

馬良がゆく

2010年10月11日19時27分発行